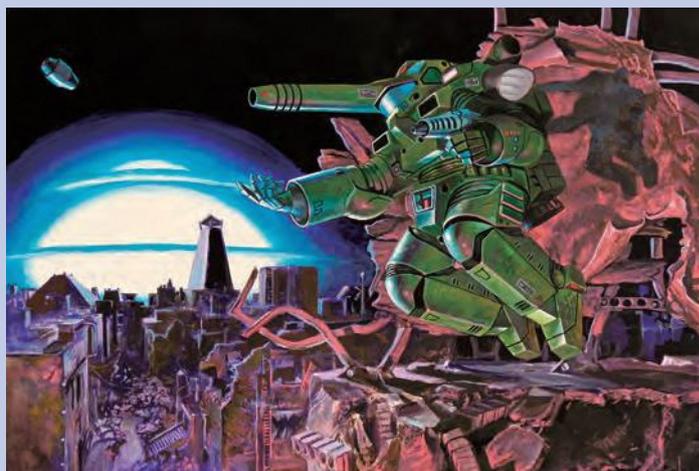


THE GALLERY

もくじ ■企画展 | 「谷川俊太郎 絵本★百貨展」 「日本の巨大ロボット群像 ―巨大ロボットアニメ、そのデザインと映像表現―」
■特集 | 作品の収蔵方法について ■追悼、田口安男先生 ■常設展示室から ■学芸員ノート ■今後の展覧会

企画展 | 谷川俊太郎 絵本★百貨展

日本の巨大ロボット群像 ―巨大ロボットアニメ、そのデザインと映像表現―

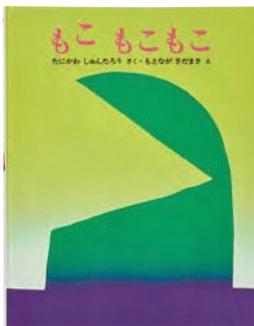


左上 「谷川俊太郎 絵本★百貨展」東京会場 展示風景(撮影:高橋マナミ)
左下 安藤栄作《宇宙のトルソ》2024年 楠 47.0×21.0×12.5cm

右上 「日本の巨大ロボット群像」展より 宇宙の戦士(1977年) 加藤直之・宮武一貴 ©スタジオぬえ
右下 田口安男《波から焔へ》1986年 油彩、テンペラ・カンヴァス 218.2×290.9cm

企画展 | 谷川俊太郎 絵本★百貨展

4月19日(土)～6月8日(日)



『もこもこもこ』(絵・元永定正)
文研出版 1977



『まるのおうさま』(絵・栗津潔)
福音館書店 1971

2024年11月、92歳で亡くなった詩人の谷川俊太郎(1931-2024)は1960年代以降、さまざまな絵描きや写真家と200冊にも及ぶ絵本を作ってきました。ことばあそび、世界のありようを認識する手がかり、ナンセンスの楽しみ、そして生きることの面白さや大変さ、尊さ、死や戦争までをテーマに、絵と言葉による表現に挑み続けました。バラエティ豊かな絵本に共通するのは、読み手に対する谷川俊太郎の希望の眼差しです。

本展では生前の谷川が本展のために書き下ろした絵本『すきのあいうえお』のほか、作家・栗津潔と共作した『まるのおうさま』など、約20冊の絵本を取り上げます。多彩なクリエイターと共作した絵本の原画、そして絵本からインスピレーションを得て制作された絵や言葉が動き出す映像、朗読や音、巨大な絵巻や書き下ろしのインスタレーション作品から谷川俊太郎の世界を体感してみてください。

企画展 | 日本の巨大ロボット群像 —巨大ロボットアニメ、そのデザインと映像表現—

6月28日(土)～8月24日(日)

『鉄人28号』(1963年)を先駆けに、『マジンガーZ』(1972年)、『機動戦士ガンダム』(1979年)、『超時空要塞マクロス』(1982年)など、これまで多くの作品を誕生させてきた日本の巨大ロボットアニメ。個性的なデザインのロボットに夢中になった経験のある人は少なくないのではないのでしょうか。日本独自ともいえる進化と広がりを見せてきたそのデザインには、空想上の荒唐無稽なロボットという存在に映像的な「リアリティ」を与えるため、さまざまな創意工夫が凝らされているのです。

本展は、ロボットアニメにおけるデザインと映像表現の歴史を、「リアリティ」を形成するうえで重要な役割を果たした「メカニズム」と「大きさ」を軸に検証するものです。会場では、展示用にデザインされた造作物や複製をメインに、原画やフィギュア、玩具、イラスト、映像なども加えて紹介し、日本の巨大ロボットアニメの変遷をたどります。デザイン画や内部透視図による「メカニズム」の表現、ガンダムをはじめロボットの「大きさ」を体感できるコーナーなどは見どころのひとつです。

本当に存在するかのようなロボットを目指した、作り手たちの熱意とこだわりをぜひご覧ください。



特集 | special issue 作品の収蔵方法について

当館のコレクションはいわきゆかりの美術と1945年以降(戦後)の現代美術を大きな柱としています。開館前の昭和55年度から作品収集を始め、現在では2400点を超える収蔵点数となっています。作品を収蔵する際には、作品を調査し、館内で収蔵方針、作品の質、状態等の面から、収蔵候補作品にするかどうかの協議の後、外部の専門家によるいわき市美術品選定評価委員会に諮り、収蔵するにふさわしいかどうか、評価額(購入価格)が妥当かどうか、判断していただいています。

収蔵方法としては、購入、寄贈、移管の3つがあります。移管というのは、いわき市の財産で他部署で管理してあったものを美術館の収蔵品に管理換えするものです。購入は画廊や作家から購入することで、これまでに約18億円かけて987点の作品を購入しています。ただ、市の財政状況が厳しくなったことや収蔵スペースが狭隘化したこと等により、平成19(2007)年度以降、作品購入予算が凍結され、15年以上新たな購入作品はありません。収蔵スペースの拡張や購入予算の復活は大きな課題のひとつです。

寄贈は、作家や所蔵家の方から寄贈を受けるもので、これまでに1400点以上あります。購入が途絶えた後にも、当館で役立ててほしいと寄贈を受けた作品はデッサンなどの細かいものも含まれますが500点以上になり、毎年、収蔵品は増えています。これまでに作品をご寄贈して下さった方々に改めて感謝申し上げます。

ところで令和6年度には、これまでにない新しい形の寄贈がありましたのでご報告します。いわき市在住の新妻英正氏が「美術館を応援したい。作品寄贈で協力してもいい。どんな作品なら寄贈を受けてもらえるのか」というありがたい申し出をしてくださいました。これを受けて、当館の収集方針をご説明し、例えばということで、複数のいわきゆかりの作家名といくつかの候補作品をご提示しました。その中から新妻氏が選ばれたのが、安藤榮作《宇宙のトルソ》2024年(ギャラリー磐城での個展出品作)でした。新妻氏は安藤氏のことをよくご存じで、「彼のことを応援したい」ということでした。

その後、美術館内で協議し、美術品選定評価委員会で承認さ

れ、収蔵することができました。当館では初めての安藤榮作の収蔵作品となりました。2017年に平櫛田中賞、2019年には円空賞を受賞するなど活躍しているのに、初めての収集だったことに、選定評価委員の方々は驚かれていました。

通常はご本人がすでに所有の作品を寄贈していただくのですが、今回のケースは美術館が欲しいと思っている作品を買ってもらったことになります。アメリカの美術館などではよく聞く方法ですが、当館では初めてのことでした。今後、このような形での作品寄贈にご興味を持たれた方は、美術館までご連絡いただくと大変ありがたいです。なお、ご寄贈いただいた作品を常設展示室で展示する際には、ご本人の承諾を得られれば、キャプションに寄贈者名を明記し、感謝の気持ちを美術館が続く限り伝えていきたいと考えています。

(館長 杉浦友治)



安藤榮作《宇宙のトルソ》2024年 楠 47.0×21.0×12.5cm

追悼、田口安男先生

当館の名誉館長である田口安男先生が、昨年の9月下旬に94歳で旅立たれたことを、親族の方から12月にご連絡をいただきました。近年は背骨を痛めてベッドの上で過ごされる時間が長いと伺ってはいましたが、元気な頃の先生を知っているがために、驚きと残念な気持ちを持たざるをえません。

田口先生は磐城高校を卒業後、東京藝術大学で学び、画家としてスタートしますが、その初期の頃から「手」を中心的なモチーフとして取り上げ、生動感のあるいくつもの手の形が複雑に絡み合う重層的な構成で、目には見えない世界の神秘的な働きが感じられるような独自の表現を生涯にわたって探求しているように見えました。

また、1968年からのイタリア留学中に黄金背景テンペラ画を学び、その技法による現代的な作品の可能性を探るとともに、日本における第一人者として技法の普及にもご尽力されました。

先生は安井賞を受賞し、画家として注目され、作品制作に励むとともに、1973年からは東京藝術大学で後進の指導にもあたられました。1998年に同大の教授を退官された後には、いわき市立美術館の館長を2010年まで勤め、美術館運営に携わりました。月に数日の非常勤の勤務でしたが、アトリエのある千葉県外房のいすみ市から通われ、重そうな荷物を肩から背負って、エレベーターを使わずに3階まで階段を一段飛ばして上がる元気な姿には、いつも驚かされたものです。



《ぬけ変わりの季節》
1977年(未完)
テンペラ・パネル
120.0×91.0cm



アトリエにて
(2012年)

館長としては学芸員が仕事をしやすいように見守る姿勢で、折に触れて作品や「もの」に対する見方などで鋭いご発言をされ、大いに刺激を受け、そのお人柄とともに知性やクリエイティブな精神に間近で触れることができたのは幸せな時間でした。

在任中には自ら企画し講師となり、針金で形を作ったものをコピー機で紙に写す「針金で描くワークショップ」をととても楽しそうに実施していたのも印象的で、また、そうした過程を経てできあがる線が面白いことに感銘を受けたことは、昨日のここのように思い出される懐かしい思い出です。

美術館の館長を辞められた後にもいわきに通われ、地元作家のアトリエで地域の画家たちに黄金背景テンペラ画の指導を手弁当で熱心に行い、その技法を手掛ける作家が育ち、後に市内画廊でグループ展が開催されるなど、地域の美術振興に大きな貢献をされたことも、いわきの美術史に記憶されるべきことです。

当館では田口先生の全面的なご協力を得て、「探し求める魂 田口安男の全貌展」(1992年)と「田口安男―描線と色彩の間―展」(2016年)を開催することができました。また、デッサンなども含みますが150点以上の作品をご寄贈していただき、購入した作品とともに当館の重要なコレクションとなっています。今後も調査研究を深め、常設展などで田口安男先生の仕事をよりよい形で伝えていきたいと考えています。

田口先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

(館長 杉浦友治)

常設展示室から

今回の常設展では「日本現代美術の開拓者たち」と題して、1950年代に頭角を現し、戦後日本の前衛美術を牽引した作家たちを紹介します。1950年代の日本では従来の美術観を打破するように、さまざまな前衛美術運動が各地で起こりました。

その代表格が吉原治良^{よしはらじろう}を中心に兵庫県芦屋^{しらかがずお}で結成された「具体美術協会」であり、今回の出品作家である白髪一雄はその中心人物の一人です。白髪は1955年の第1回具体美術協会展にて約1トンの壁土に裸で飛び込み、雨の降りしきるなか縦横無尽に動き回るパフォーマンス《泥にいどむ》を発表し、注目を集めます。白髪はその後天井から吊るしたロープにぶら下がり、床置きのカンヴァスや紙に足を使って絵具の塊を伸ばして描いた巨大な絵画連作を手掛けました。出品作《天殺星黒旋風李達^{てんさつせいこくせんふうりたま}》もその一つであり、絵具の物質感や、肉体と精神のせめぎあいのなかで行われた行為(アクション)の軌跡が表れています。

一方、菊畑茂久馬^{きくはたもくま}は福岡で結成された前衛集団「九州派」の一員として活動し、地方から中央のアートシーンに対して挑戦的な表現活動を続けました。菊畑は「反芸術」と称されたように九州派脱退後も電柱に大量の五円玉を打ち付けた《奴隷系図(貨幣による)》(1961年)や日用品を用いた連作〈ルールレット〉など、それまでの芸術の世界にはなかった卑近な物質——日常や世俗の世界を取り入れた作品を手掛けます。その



白髪一雄《天殺星黒旋風李達》1962年 油彩・カンヴァス
182.5×273.0cm



菊畑茂久馬
《植物図鑑 二》
1965年 油彩、木、
プラスチック
202.7×135.0×
10.0cm

後制作された出品作《植物図鑑 二》でも描かれた植物とプラスチックでつくられた人体の一部が重なり、イメージと物質の融合が見られます。首筋や手の甲など人体の中でもあえて目に留まりにくい箇所が選ばれているのも、物質としての存在感や植物(イメージ)に人体(物質)が侵食されていくようなまがまがしさを強調しています。このように絵画と物質のありかたを模索した菊畑は70年代になると作品の発表をせず人知れず数多のオブジェを手掛け始め、やがて80年代に連作〈天動説〉の発表をもって絵画へと回帰しました。本作はそうした作家の芸術観の過渡期にある作品とも見ることができます。

本展ではほかにも、実験工房やネオ・ダダイズム・オルガナイザーズ、高松次郎、中西夏之といった日本現代美術の先駆者たちの作品を展示します。新しい時代を開拓した熱量をぜひご体感ください。
(学芸員 伊藤圭一郎)

* 本年は菊畑茂久馬の5周年にあたり、菊畑茂久馬美術青家協会が「LINKS 一菊畑茂久馬」と題して、菊畑作品を所蔵する全国の美術館の協力のもと、各館所蔵の菊畑作品の展示情報を発信するプロジェクトを実施しています。協力館である当館も今回の常設展にて所蔵品《植物図鑑 二》を展示します。

学芸員ノート | 展示室での撮影について

近年、日本では所蔵者の許可を得られれば展示室での撮影をOKとする館が増えてきています。その理由のひとつは来館者サービスのためで、その画像は個人的に楽しむことができます。また、主催者側にとっては著作権者の許可が得られるものであれば、画像がSNS上で拡散して集客に結びつくという広報的効果を期待して積極的になることが多そうです。

昨秋、東京のあるミュージアムでのこと。そこの施設は、常設展では館所蔵の作品は撮影OKで、常設の陳列品でも他所から借りているものや、企画展では通常撮影禁止としています。ところが、その時の古代のものを扱った企画展では、全面的に撮影OKとしていました。ふだんとは異なった客層が多かったこともありますが、感覚的にはほとんどの人がカシャカシャと撮影しているかのように感じられるほどで、落ち着いて鑑賞できませんでした。

そして少し気分が良くなかったのは、360度ぐると鑑賞できるガラスケースに入った作品の背中側を見ている時に、正面から撮影している人の写真の中に自分が写ってしまうことに気づいたからです。こう書きながら、自分が撮影した写真を見てみると、他人がしっかりと写っていました。このようなケース展示では、混雑した会場で撮影する場合、他人が写ることを避けることは、アップでもしない限り簡単ではないでしょう。その後、X(旧ツイッター)でその展覧会を検索してみると、なかには他人の顔をぼかしているものもありましたが、他人がはっきりと写り込んでいる写真を多く見かけました。

私は学芸員にしてはおそらく展示室で撮影を多くする方で

す。視覚的記憶力が弱いこともありますが、額縁を参考にするため、あるいは、カタログの写真では分からないような、展示された時の作品の佇まいのようなものを記録するため、撮影が許可されている場合、気になった作品は撮影します。ですので、一観客としては撮影できることを歓迎し、今後ともそういう機会が増えていくことを願っている立場です。

ただ一方で、上記のように撮影がOKのために落ち着いた鑑賞ができなかったり、知らないうちに自分が写真に写り込んだりしてしまうことに不満を感じています。そしてふと解決策になるかも知れないと思ったのは、最近、展示場で自由に話せる「トーク・フリー・デイ」を、通常は休館日である日に特別に設ける試みがあるように、撮影がOKの人気の展覧会では「撮影禁止の日」を設けることです。静かであれば作品の見え方も違ってくるだろうから、そういう日にぜひ行きたいと思う人もいるのではないのでしょうか。

ところで当館では、企画展では近年いくつかの条件がクリアできれば撮影をOKとすることを増やしてきています。一方、現代美術を展示する常設展では今のところ撮影をOKしていません。その理由のひとつは作品の安全性を考えてのことです。どうしても撮影に熱中すると周囲が見えなくなり、例えば大きい作品を後退しながら撮影しようとして床に設置している作品と接触すると、取返しのつかない損傷が発生しかねません。ただ、今後の状況次第では、撮影をOKとすることもあるとは思いますが、この件についてみなさんのご意見等あればお寄せいただけたらありがたいです。

(館長 杉浦友治)

今後の主な展覧会のご案内

企画展

谷川俊太郎 絵本★百貨展

令和7年4月19日(土)～6月8日(日)

日本の巨大ロボット群像

—巨大ロボットアニメ、そのデザインと映像表現—

令和7年6月28日(土)～8月24日(日)

常設展前期

日本現代美術の開拓者たち

4月22日(火)～10月19日(日)

前期Ⅰ 特集:谷川俊太郎といわき

4月22日(火)～7月21日(月・祝)

前期Ⅱ 自然を見つめて

7月23日(水)～10月19日(日)

*都合により会期、内容等に変更が生じる場合があります。